
ところにより、にわか雨

七星

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ところにより、にわか雨

【Nコード】

N3173B

【作者名】

七星

【あらすじ】

——あなたの目に映る雨の色は何色ですか？青？水色？それとも…。この先は是非、作中でご確認ください。

<1>

別に、大したことではなかったんじゃないかと思う。

でも気が付けば、そばに雨と誰かが居た。

K 雨 1

この頃。生きる理由を探すようになった私は、高校一年生の佐藤^{さとう}夏希^{なつき}と言います。なんて、心の中で自分を紹介する私は重症かな。

大型休暇が明けて一週間目。気が早すぎるかもしれませんが、もう来年の夏休みが恋しくてならない。そんな日に、眠たい目を無理やりこじ開けてまで起き、玄関の扉を開けば大量の水が地面を叩きつけている。ますます学校に行く気がなくなってきた。

自分しかわからないくらいに小さくため息をついてから、真っ白い傘に手を伸ばした。冷たい外気のほうへ向けて広げ、誰も居ない家の中に顔を向ける。

「行ってきます」

呟くように言葉を残し、私は扉を閉めた。

新しく買った黒いローファーが、雨に濡らされていく。私が靴を買い、いつもこうなる。毎度のことで、もうショックを受けることもなくなった。

いつもの通りにやる気なく学校へ向かって歩いていると、手をつなぐ男女が視界に入った。その二人が交わす言葉は、雨にかき消されることなく全て、耳に。要約すれば、朝から甘い言葉を叫ぶバカップルだ。

そんなカップルを見て思い出す、一つ年下のK^{ケイ}。ううん……慧。

Kとはいわゆる彼氏と彼女という関係だった。中学時代を含めて数えれば、多分一年半以上付き合っただけ。過去形なのは、お互いに会える時間が減り、好きっていう気持ち弱まった、というKの一言により、別れたから。確か、夏休み前だったと思う。……付き合いをやめたあの日も、そういえばこんな風に雨が降っていたな。なんて。

通学路の道端に設置されているベンチには、Kとの昔の思い出がある。忘れたくない。仮にも初恋の人、なのだから。流石にその時々で鮮やかに色づいていた場面を浮かべる、なんてことは恥ずかしくもあり、それ以前に出来ないけれど、けして忘れることは無い。

珍しいこともあるもんだな。いつも座る人の居ないそのベンチには、男の子らしき人が座っている。傘も差さずに。何してるんだろう。そう思い、一步一步足を動かすたび、目に力が入るのがわかる。

K……慧……。野口慧^{のぐちけい}。艶のある黒髪が、彼だ彼だと思わせた。

「……慧………?」

語尾を上げ、確かめるようにして元彼の名をあげたとき、昔の思い出が一気に色づいたような気がした。

K 雨 2

長い間会わなければ、Kへの恋愛感情が次第に弱まるものだと思っていた。でも、どうやら違った。私の中でKは、今でも好きな人らしい。過去系じゃない。今も好き、きっとそう。

これが、Kとのよりを戻すラストチャンス。そう思えた。

何だかんだいって、Kは必要以上にモテはやされていたから、いつ新しい女の子がKの隣に並んでいても、おかしくないことを私は知っていたから。

誰にでも見せる可愛らしい笑顔が大好き。小麦色の肌も、それに負けじと黒い髪も、ほんの少し高い目の位置も、何もかも、好きだ。

そんな考えと一緒に、無我夢中でベンチへ翔けた。途中で傘を離したり、靴下がぬれて、ローファーの中まで濡れてしまうことなんて、気にせずに走り、Kの前で止まった。

そして叫んだ。K、と。

彼も叫んだ。私が叫んだのと、ほぼ同時に。

「……………二、カ……………」

それが、私の名前ではないことくらい、すぐにわかった。だけど、今はそんなことを気にする余裕なんて、ない。

一番に目がいったのは、肌。付き合っていた当時とは違い、白く染まっている。今までは夏が終われば、人一倍黒くなるKの肌が、小麦色さえしていない。でもそんなこと、Kと会えた喜びによって消えていった。

KはKで、ベンチから腰をあげた。私より背の高かったはずのKと、同じ目線で見つめあっている。私、また身長伸びたのかな。

「ニカっ……」

お互いに酸性雨をずいぶんと吸収した制服で、どちらともなく抱きしめた。目の前にあるのは、雨に打たれ続けたのか、青白くなったKの顔。

その間、ずっと抱きしめている相手の名前を呼び続けた。

K 雨 3

しばらくの間抱きしめ合うと、私たちは突然我にもどり、傘を拾ってから二人で学校へ向かった。

「なんか……色々と、ごめん」

Kにはない左目元のほくろが、細められた目に引き寄せられる。

白い傘に、二人。相合傘をして、ほんの少し、さっきのように寄り添った。

「ううん、私こそ……」

背中に手を回したとき、彼から体温は感じられなかった。それくらい、彼の体は冷えていた。一体、どれくらいの間、雨に打たれていたんだろう。

謝罪をした後、沈黙。それを破ったのは、冷温の彼。

「……俺ら、どうかしてたな。お互いを、好きな人と勘違いしていたなんて」

「そう、だね。好きな人……年下なのに、私。同じ制服着てること

すら、気づかなかった」

「年下……。俺の顔って、そんなに幼い？」

困ったように笑う彼は、Kではなく、同じクラスの山吹君、……
やまぶきいちな
山吹一那君だった。

落ち着いた今、山吹君の顔を見たら、何故彼をKだと思ったのか、不思議に思えてならない。また彼も、私と同じだと言った。

「けい……って、やっぱ元彼の名前？」

私は一度、首を縦に動かした。

「そっか。こっちのニカってのも、元カノのあだ名」

恥ずかしそうに頭をかく彼は、背中に背負っていた鞆をはずし、二枚のタオルを取り出した。私の傘と、同じ色をしたタオルを。

「ちょっと、拭いていこっか。雨の日に正門で挨拶するのは、生活指導のゴリ松じゃないはずだから」

少し拭けば、変なこと言われずにスルーできると思う。彼は自分

の言った言葉に、そう付け加えた。

K 雨 4

「つか、さ」

濡れたタオルを肩にまわしたK、じゃなくて……山吹君が喋る。
山吹君のバックには、雨の日ならでわの分厚い雲が宙を浮かんでいる。

その雲が白いようで黒くて、灰色じゃないけど青黒い……私の知
っている日本語では、これくらいしか言いような無い色。それらが
誰かの悲しみを物語っているように思った。

「佐藤って、案外喋るんだね」

廊下を歩いている途中、会話が一段落し、二人だけで黙り込んだ
後。静かに息を吸い込んだ山吹君は、思い出したようにそう言う。

グラウンド側を歩く彼の顔に水が付き、汗が流れるようにして雨
粒が頬を伝う。……否、汗よか、目元にたまる滴のほうがいいか。
汗水たらす姿より、無表情で涙を流しているほうが、山吹君には似
合いそうだもんね。

「よく言われる。山吹君も、意外と喋るね」

「そう？ 俺はよく言われない。逆に、もっと喋れよって言われる

かな」

「友達に？」

「うん。自分のことを、ね」

秘密主義者なんだ、と思ったとおりに告げると、彼は声にならない笑の顔で笑った。

山吹君の笑った顔が、昔のKと被って、彼とは正反対に気分が曇る。さっき、自分の目で映した空みたいだ、私の心。何故こんな気分になったのか判るほど、頭は冴えてないけれど、申し訳ないような気持ちでいっぱいになっていることくらい、気づくことが出来る。

喋るうちに教室の前へついて、山吹君の右腕が教室の扉をスライドさせた。

友達に挨拶をしようとしたけれど、思わず言葉を飲み込んだ。たくさんの視線が刃のごとく私を襲ったから。なんてったって、男女の高校生二人が、並んで入れるほど大きい扉。その向こうで待ち構えていたのはクラスメイトの冷たい視線。主に、女子の。

K 雨 5

ああ、私あほだ。……あほって言葉、嫌いなものになあ。

なんていうか馬鹿は、一般でいう頭悪い子ってイメージだけど、あほは、”人間的”に頭が悪い印象を受ける。だから、あほって言葉は嫌いだし、そう言われるとショック。

そんなことが頭をめぐる中でも、私の体を突き通していく、針のように鋭い視線たちの威力は弱まらない。むしろ、鋭さを増す一方。

額と前髪の生え際に、冷や汗が滲んできたのが分かる。いや、もしかしたら、脂汗なのかもしれない。そして、実際に経験したことはないけれど、金縛りにあったみたいに体が動かせなくなった。人の話を聞いているときは楽しそうに聞こえた金縛りも、自身が体験すると、不安、不安で息をするにも精一杯。

影響、受けすぎだな、私。その場から離れることを躊躇していた汗が、何かの拍子に次々と流れていく。すると、突然視界が真っ白になった。急に白くなるもんだから、目がギンギンする。

「何突っ立ってんの」

隣に立っていたはずの山吹君は、いつの間にか私の目の前で立っていて、私の顔を覗き込んだ。

血の気がしていなくて、生きているように感じなかった山吹君。

その彼にも、今では青味が消え、活気に満ちたものになっている。

「佐藤?!」

もう、限界だ。まだ続きそうな視線に絶えられる自信がない。

耳の向こうで、山吹君の声が聞こえる。なんだ、雨の中で元カノの名前を口にした時のボリウムは、最大でも、叫んでもいなかったんだ。

彼の肌で、一度は白くなっただけの視界。刹那、光が少しずつ、消えていった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3173b/>

ところにより、にわか雨

2010年12月25日02時10分発行